

理学二六・二二%、工学一二・三%、農学四三・六%、医学・歯学三三・七%、教育五九・一%、その他等(家政、芸術、その他)六三・〇%となっている。

(26) 『白書』、八五―八七頁参照。

(27) 参考までに他分野の女性割合を記すと、社会科学三九・七%、理学二一・五%、工学一〇・九%、農学三五・三%、医学・歯学四四・七%、薬学・看護学等五六・五%、教育五六・五%、その他等(家政、芸術、商船、その他)四六・一%となっている。

(28) 社会科学系大学院の女性割合と同じである。

(29) 『白書』、八三頁参照。

(30) 『白書』、一六八―一六九頁参照。

(31) 既に示したように、この分野の女子学部学生の割合は理学二六・二%、工学一二・三%、大学院修士課程は理学二一・五%、工学一〇・九%となっている。ボジテイヴ・アクション、アフターマテイヴ・アクションを巡る問題については本書所収の池田論文参照。

(32) 博士課程在籍の女性が男性に比して相対的に少ないことは、女性研究者もまたそうなることを意味している。そしてそれが望ましからざるスパイラルを形成する(している)可能性は高い。

(33) 『白書』、二五六―二五九頁の数値を見れば、修士課程は六割、博士は四割が女性ということになる。

(34) これは「日本哲学会男女共同参画ワーキンググループ」が二〇〇五年に実施した「男女共同参画推進に関するアンケート調査」である。自由記述も含めたこのアンケート内容については、日本哲学会のホームページを通して閲覧可能であったが、ホームページ改装に伴い現時点では不可能となっている。これら一連の問題については本書所収の小島論文を参照。論者の学

生時代の友人はこの種の「偏見」によって進学できなかったが(それを知ったのは後日である)、彼女の人生全体を考えると複雑な気分となる。天逝した彼女にささやかながら本稿を捧げた。

また本稿作成にあたり、とりわけ文部科学省の「報告書」に関連した問題については、同省生涯学習政策局男女共同参画学習課の課長である藤江陽子氏に有益な示唆をいただいた。ここに謝意をあらわしたい。

(かなざわ おさむ・学習院大学)

特集\*男女共同参画

## 哲学、女、映画、そして…

今村 純子

はじめに

シモーヌ・ヴェイユ(Simone Weil、一九〇九―四三年)は激動の時代をわずか三四年の生を駆け抜けたフランス系ユダヤ人女性思想家である。生前、書かれたもの大半は草稿段階のものであり、没後、農民哲学者ギュスターヴ・テイボン(Gustave Thibon、一九〇三―二〇〇一年)の手によって編纂された彼女の膨大なノートからの抜粋『重力と恩寵(La Pesanteur et la Grâce)』(一九四七年)が戦後の渴きを抱く人々の心の琴線に触れ、シモーヌ・ヴェイユの名がはじめて世に知られるようになった。この書のうちに自らの合わせ鏡を見た、当時、ガリマール社の編集者であったアルベル・カミュ(Albert Camus、一九一三―一九六〇年)の手によって、一九五一年から彼女の草稿が

次々に単行本化され、ようやくシモーヌ・ヴェイユの著作を手にするようになったのである。

わたしはこのシモーヌ・ヴェイユという人の思想を中心に、哲学の分野において研究を続けている。だが、学生時代から今日に至るまで、同様のスタイルで研究をしている人に出会ったことがない。「何を研究しているのか?」と聞かれ、シモーヌ・ヴェイユの名を出した途端、相手の顔色からスリッと興味の色があせてゆくという経験を幾度となくしてきた。それにもかかわらず、わたしにとつてシモーヌ・ヴェイユの言葉、その思想は、今日現在も尽きせぬ思考の泉である。

このことは、わたしの個性と資質にかかわる問題でもある。ソクラテス以前の哲学者たちが詩において、そしてプラトンが、戯曲とも、神話とも、詩ともつかない独自の形

式において思索を深めたのならば、今日、東洋の小さな島国で思考するわたしにとって、言葉以前の直観にひとしい判断力が、どうしようもなく自らをシモーヌ・ヴェイユに結びつけていた。その感受性の深さ、洞察力の鋭さ、そして比喩のイメージの豊かさにおいて、シモーヌ・ヴェイユを超える人はいないように思われた。

このような判断力のありようは、哲学をいやおうなく芸術に近づける。そしてこの心性に近い人々を、ジャンニ・ヴァッティモ (Gianni Vattimo、一九三六年―) が提唱する「弱い思考」に連なる現代イタリア思想界を代表する哲学者たちのうちに見出すことができる<sup>(1)</sup>。かれらは一樣に、哲学のみならず美学や政治学をその専門分野にしている。シモーヌ・ヴェイユの思想において美はその中核をなすものである。だがそれは、芸術に限定される美的判断ではなく、いかなれば「哲学という芸術のかたち」を問うものである。わたしたちが真に「生の創造」をなしているとき、なによりもまず、強烈な美の感情が自らの内側から湧き起こる。そのときわたしたちはなによりもまず自分自身をもっとも強く感受している。こうした美的判断のありようは、万人が素朴に理解しうるものではない。実のところ、ヴェイユ自身、生前、両親に宛てた手紙のなかで次のように語っている。「自らのうちに純金の預かりものが宿った

と折口信夫(一八八七―一九五三年)は述べている。折口が述べる「批評」とは、カントの述べる「批判」にほかならない。このとき、「哲学研究すること」において、その人自身の個性と資質によってしかなしえない「創造作用」が認められよう。

「硬質で緻密な純金のかたまり」にほかならないシモーヌ・ヴェイユの思想に素朴に近づこうとすれば、すぐさま遠心力で吹き飛ばされてしまうであろう。それゆえわたしはこれまで、彼女の思想を捉えるためにこそ、彼女の思想とはまったく別の光を当ててみるという方法をとってきた。それは同時代の日本思想や女性の思想家たちの思想をヴェイユの思想にぶつけてみるという比較思想研究や、あるいは、現実の生々しい社会問題のなかで彼女の言葉がどれだけの強度と深度をもつのかを見極めようとする営みである。そしてもっとも彼女の思想を受け取り直すことに成功したと言えるのは、映画という具体的な芸術作品のうちに、彼女の言葉、思想がどう生きられ感じられるのかを見極めようとする営みである。

しかしこれらはすべて後づけである。わたしがなしたことは、何かに出会ったとき、何かに心底突き動かされるとき、「シモーヌ・ヴェイユであったらどう考えるであろうか?」と思考し続けていたにすぎない。その結果として、

感覚を払拭できないが、この純金の預かりものを与つてくれる人がいないのではないか。なぜなら、この純金の預かりものは緻密であり、分割できず、これを受け取るためには、注意の努力が必要なのであるが、誰もこの努力をしてくれないのだから。」<sup>(2)</sup>、と。

この「硬質で緻密な純金の預かり物」の受け取り手として、とりわけ、ジョルジョ・アガンベン (Giorgio Agamben、一九四二年―) の名を挙げる事ができよう。美的・芸術的センスに恵まれたアガンベンは、深刻な社会的・政治的問題を考察する一方、洗練された詩学をもにしている。さらに演劇や映画にも造詣が深いアガンベンは、パゾリーニの映画『奇跡の丘』(一九六四年)に俳優として出演している。こうした思考のスタイルは、まさしくアガンベン自らが述べる「パロディ」にほかならないであろう。真摯で深い思想を真摯で深い態度で臨めば受け取り直せるというものではない。真摯で深い思想を、プラトンが述べる、<sup>エロース</sup>「愛が宿る「やわらかい心」<sup>(3)</sup>」で受け取り直すことができるかどうかの問題なのだ。そのことにアガンベンはつねに意識的な哲学者である。

#### 1 哲学すること、哲学研究すること

「批評とは時代を映す最高の哲学でなければならぬ」

われ知らず、こうした様々な思考のスタイルがあらわれ出たのである。そして実のところ、あらゆる知的創造作用に携わる人間は、考えてから創造するのではなく、創造してから考えるものではなからうか。というのも、その人においてその人の個人性を超えるものがあらわれ出ないかぎり、他者と共有できる普遍性など獲得することなどできないであろうからである。ヴェイユは、哲学に固有の方法について次のように述べている。

哲学に固有の方法は、解決不可能な問題を、その解決不可能性において、明晰に把握し、次に、何も加えずに、じっと、たゆまず、何年もの間、希望も抱かずに、待機のうちにそれらを観照することにある。この基準に照らしてみると、哲学者はほとんどいない。ほとんどというのも、まだ言いすぎである。超越への道行きは、知性、意志、人を愛するといった人間の能力がある限界に突き当たり、その敷居に留まり、そこから一步も進めず、向き変わることもせず、自分が何を望んでいるのかも知らずに、待機のうちに留まるときに果たされる。これは極限の屈辱状態である。これは、屈辱を受け入れられない人には不可能なことである。天才とは、思考の領野においてこの屈辱を受け入れるという超自然的な徳のことだ

ある。(4)

わたしは誰しもがこの天才への細かい道程にひらかれている。身体的にも、精神的にも、「屈辱」を受け入れることなど本来的にはなしえない。だがこのことに同意する超自然的な一点が誰しも心のうちにある。ここには奮い立つような躍動感が見られる。

ところで、哲学が希求する真・善・美が、それら抽象的な言葉に留まるのならば、これらの言葉などむしろないほうがましであろう。たとえば、善や正義という言葉が発したとき、わたしたちがどこか居心地の悪さを感じるのとは、これらの言葉のうちに、善ではなく「善と認められること」が、正義ではなく「正義と認められること」が内包されているからであろう。それゆえ、これらの言葉が鮮烈なイメージにおいて生きられ感じられるときにはじめて、これらの言葉は胎動し始めるのだ。これはとりわけプラトンという人が様々な比喩の力動性において開示したことである(5)。

とはいえ、その人の個性と資質に沿った、その人だけの思考のスタイルを孤高に体得するのは、学問の場が何らかの組織を前提としている以上、きわめて矛盾したありようを呈してしまうことも否めない。そしてそれはまさしく

あり、また、そこから湧き立つイメージが、あたかも芸術作品に接したときのような圧倒的な美の感情をわたしの内側から掻き立てたのである。

貧困には他にいかなる等価物も見当たらないような詩がある。それは、悲惨さという真理のなかに見られる悲惨な肉体から発する詩である。春、桜の花の散る光景は、もしその儚さが、あれほどまでに感じられるのでなければ、人の心を打つことはないであろう。一般的に言って、極限の美の条件は、距離が置かれることによるのであることだ。星座は不変である。だが非常に遠くに存在する白い花々はそこにある。だがすでにしてほとんど破壊されようとしている。同じように、人間が純粋な愛をもって神を愛することができるのは、神をこの世界の外に、天にあるものと考えられる場合ではない。それは、神が人間の姿をしてこの世に存在している場合、か弱い、侮辱され、殺害されるものとして存在している、あるいはまた、さらに大きな度合の不在にほかならない、食べられてしまう微小な物質として存在しているということである。(6)

ヴェイユが不幸について「不幸は滑稽である」(6)と述べたように、ある種の滑稽さを伴うものもある。すなわち「いったい、わたしはここで何をしているのか？」というような、標本に生きたまま貼りつけられた虫がバタバタしているようなありようがどうしようもなくそこには見られるのである。そして、「最大の危険は、集団の側に人格を抑圧しようとする傾向性があることではなく、人格の側に、集団のなかに突進し、そのなかに紛れ込みたいという傾向性があることである」(7)とヴェイユが述べるように、わたしたちの誰ひとり集団の呪縛から逃れることができない。このことにわたしたちはつねに最大限の注意を払いつつ思考すべきであろう。

## 2 女性であること

ところで、わたしがシモーヌ・ヴェイユに惹かれた大きな理由のひとつに、彼女が「女性であること」が挙げられる。彼女が女性であるがゆえに経験する衝突や軋轢や矛盾にある程度の共感をもったことは否めない。とはいえそれは、本質主義的に「女性であること」ではない。

それではヴェイユが「女性であること」のいったい何が、わたしの心の琴線に直接触れえたのであろうか。それは、彼女の「弱さ」や「儚さ」や「脆さ」への眼差しの深さで

極限の美の条件は、「遠さ」や「小ささ」といった「ほとんど無」のうちにある。わたしたちは消え入りするような「儚さ」のうちに極度の美を感受する。そしてヴェイユの美の転回は、これがそのまま社会的次元への移行を果たすことにある。「ほとんど無」とされた人とはどういう人であろうか。それは、一切の「社会的威信」を剥奪された人である。それは、一二人の弟子すべてに自分とは無関係な人だとみなされ、さらに、「なぜなのか？」と神に問うてもそこにはぞつとするような沈黙が充満する空間に立たされた「十字架上のキリスト」の似姿の状態である。すなわち、悪の奥底に堕ち、「呪い」そのものとなった人の状態である。そしてこの状態において、この状態に同意する一点が見られるならば、そこには、ドストエフスキーが「キリストの美」と述べた至高の美の条件が見出されるのであった。

こうした思考を獲得する過程でヴェイユ自身もつとも触発されてきたのは、プラトンのテクストである。プラトンを敷衍解釈する過程でヴェイユの思索は最大に深まってゆく(8)。とはいえ、プラトンのテクストは美文とは言い難いであろう。だが端的な美が必ずしもわたしたちを触発するとはかぎらない。むしろけつして言葉になりえないものを言葉に映そうとする悪戦苦闘の痕跡が放つ美に、わた

私たちは揺り動かされるのだ。わたしにとつてのヴェイユのテキストも同様である。未完成で矛盾を孕む彼女のテキストはわたしを突き動かす<sup>10)</sup>。ここまでの深さにおいて思索した人が現に存在したという事実には涙が出るほど勇気づけられ、ハッと目の前に世界が切り開かれるような感覚をおぼえる。そしてヴェイユのテキストは、いつさいの「力」から解き放たれた「ほとんど無」が「女性的なるもの」と結びついたイメージとして開花するときに、最大の強さを発揮する。

はじめて身籠ったひとりの幸福な若い女性が、産着を縫いながら、しかるべくそれを縫うことを考えている。しかし彼女は片時も胎内の子どものことを忘れることはない。同じ瞬間、牢獄内の作業所で、ひとりの女囚がこねまじかるべく縫おうと考へながら縫っている。なぜなら、彼女は罰せられることを恐れているからである。

このふたりの女性は同じ瞬間に同じ仕事をし、同じ技術的困難に注意を奪われていると想像することができる。しかし、母親になる女性と女囚との間には差異の深淵が広がっている。あらゆる社会問題は、女囚の状況から母親になる女性の状況へと労働者を移行させることである。なされなければならないことは、この世界とも

うひとつの世界が、その二重の美において、ちょうど産衣にくるまって生まれてくる赤ん坊のように、労働の行為にあらわれ結び合わされることである。<sup>11)</sup>

「産着を縫う」ふたりの女性が、いつぼうは身体に宿ったわが子の誕生を想い、「やわらかい心」で縫っている。だが他方は、罰せられないために、さらに敷衍すれば、殺されないために、恐怖のもと「かたくなな心」で縫っている。行為の内実ではなく、行為がどのような心でなされているかが問題なのだ。さらにこの比喩をカントの動機説に移せば、同一の行為の動機が両者ではまったく異なることが暖かいイメージにおいて表現されている。大切なのは、行為の動機の絶対的差異がわたしたちの心に映し出され、それがわたしたち自身の「生の創造」を触発するかどうかである。

ここで、近代日本における女性の知性の開花のかたちに目を転じてみたい。一九五八年に谷川雁（一九二三年）らが福岡県、筑豊で立ち上げた炭坑労働者の共同体「サークル村」では、森崎和江（一九二七年）、石牟礼道子（一九二七年）、河野信子（一九二七年）といった類まれな知性を開花させてきた女性たちがいる。着目すべきは、彼女たちが当時の男性のような高等教育を一切受けていな

いということである。彼女たちの思考空間とは、不条理と矛盾に満ちていながら——まさしくシモーヌ・ヴェイユが述べる「真の人生との接触」<sup>12)</sup>がある——炭鉱という苛酷な労働現場である。そして石牟礼道子は、さらなる不条理と矛盾に満ちた、水俣病という身体が侵される経験を自らの経験として身体に染み込ませていったまさしくそのときに、わたしたちが今日知る作家・石牟礼道子が誕生したのである。

哲学の抽象的な世界は、具体的な世界に衝突したときにはじめてその色彩を放つ。だがその具体的な経験とは、それまで自我が寄って立ってきたものすべてが完全に破壊されるといったところまで深められねばならない。まさしく「言葉を失う」という「解決不可能性」に佇むときにわたしたちは、「関係性の橋を渡す」という意味における「ロゴス＝言葉」を獲得しよう。ここで銘記すべきは、身体性が認識に不可欠だということである。

他方で、「サークル村」の女性たちとは対照的に、医師という裕福な特権階級に属する家庭に生まれ育ったシモーヌ・ヴェイユは、表立ってはユダヤ人差別を受けることなく、当時の女性としては珍しく高等教育を受ける機会に恵まれている。高等学校ではアラン（Alan、一八六八—一九五一年）の薫陶を受け、高等師範学校卒業後、高等学校

の哲学教授として赴任する。ここまでは多くのフランスの男性哲学者が辿るオーソドックスな道程と何ら変わらない。だがヴェイユの独自性が発揮されるのはここからである。ヴェイユは教職の傍ら、労働運動に身を投じ、教授資格者が受給していた特別手当を失業者にわけ与え、彼女自身、失業者手当と同額で生活することを己れに課している。さらに、「研究休暇」と称した一年間の研究とは、一九三四年—三五年という年代にあつて、一女工としてルノーその他の工場で働く「工場生活の経験」をすることであつた。一見したところ奇怪なこれらの行動は、彼女自身にとつては必要不可欠な営みであつたのではなからうか。出生と同時に、いやおうなく自らに張りついている様々な属性、それらに付帯する「社会的威信」をあらんかぎりの力でかなぐり捨てようとする過程において、彼女は彼女自身を捉えようとしたのではなかつたか。宮沢賢治『春と修羅』の序に倣えば、「わたくしといふ現象」を離れ、「ひかり」となるうとしたのではなかつたか。実のところ、「工場生活の経験」は彼女の想像をはるかに超える自我の破壊をもたらすことになつた。そしてこのときに、何にも寄らず、たったひとりで世界に向き合い、たったひとりで思考する、哲学者シモーヌ・ヴェイユが誕生したのである。一九三三年という象徴的な年に学位論文「デカルトにおける科学と知

「覚」をあらわし、カルテジアンとして哲学的な出発をはたしたシモーヌ・ヴェイユは、一九四一〜四三年というもとも暗い時代にあつて、「われ考える、ゆえにわれあり」から「われイメージする、ゆえにわれあり」へと転回し、イメージの哲学者の急先鋒に立つことになる。

### 3 映画という芸術のかたち

先述のように、わたしがつともシモーヌ・ヴェイユの思想を捉え直したと確信しうるのは、よく知られた映画を論じることにあつてである<sup>(13)</sup>。シモーヌ・ヴェイユからはむしろ離れ、映画という具体的な芸術に沈潜していったときに、ヴェイユの名をいっさい出さず、ヴェイユの思想をいっさい語ることなく、彼女の思想がわたし自身の言葉としてあらわれ出てきたのだ。自らの意図に沿って思考しているかぎり、それはその人よりも高くも低くもない。自らにおいて自らを超える思考があらわれ出た時にはじめて、他者とながつてゆける普遍性の光が見える。この点に關してたとえばヴェイユが、「实在の神」と「想像上の神」との絶対的差異について述べた次の言葉を重ねることができよう。

殉教者たちは神と離れているとは感じなかつたが、か

あろう職業に従事しているということである。かれらはいずれも、身体的感覚をもつて自然の豊かさとその脅威を知悉して生きてきた、大地に根を下ろす職人である。そして自らの病に対してすらも自然必然性として同意している姿が映し出される。その儚さ、その脆さに同意するというとてつもない存在の強さによつて放たれる美が画面を圧倒する。そのとき、「毒だとわかつていて川に有機水銀を垂れ流した」公害企業が、この地にまったくなじまない異質なものと浮き彫りになってくるのである。その落差、その明暗を映画『阿賀に生きる』は見逃さない。悪は悪の相貌をもつて立ち現われてはこない。往々にして「優しい、善意の笑顔」をもつてわたしたちの前に立ち現われる。それゆえ悪を被った人はそれを語る言葉をもちえない。だが美だけはどうしようもなくわたしたちの心に宿り、わたしたちを突き動かす。それは新潟水俣病にまったく興味をもたなかつた人々の心を覚醒させ、転回させるまでの射程を有している。

舌を切り取られた真理と正義は、それらのほかにいかなる救いも期待しえない。美は語らない。美は何も言わない。だが美には呼びかける声がある。美は呼びかける。そうして声なき正義と真理をあらわし出す。それはちよ

れらが念頭においたのは別の神であつた。それにおそらく殉教者にならなかつたほうがよかつたのである。責め苦や死のなかに見出したかれらの神は、ローマ帝国が公式に採用し、そして、皆殺しという手段によつて押しつけた神となら変わらない。<sup>(14)</sup>

この章句を敷衍すれば、想像上で思考するならば、思考しないほうがましだということである。これは哲学という学問がその抽象性のために孕む想像力の欠如のありように鑑みるに、深く重い洞察であろう。

ここで、佐藤真監督映画『阿賀に生きる』(一九九二年)を取り上げてみたい。このドキュメンタリー映画のモチーフは何かと問われれば、それは紛れもなく「新潟水俣病」である。だがこの映画に水俣病は表立ってはあらわれてこない。そこであらわされているのは、雄大な阿賀の川と共に生きる人々の「存在の強さ」であり、その存在の強さが放つ鮮烈な「存在の美」である。ところで、この映画の主人公となる三組の老夫婦はいずれも八〇歳前後の、水俣病の症状が出ているのに水俣病と認定されない「未認定患者」である。そして銘記すべきは、かれらはいずれも、水俣病を発症しようがしまいが——小さな田んぼ作りや舟大工や餅屋といった——おそろくかれらの代で最後になるで

うど犬が雪のなかに息絶えそうになって倒れている主人のまわりに人々を呼び寄せるがごとくである。<sup>(15)</sup>

悪や不正義は名指すことができず、悪や不正義はじわじわとわたしたちの心を侵食してくる。ここで力をもつのは、かぎりない「弱さ」のうちにある美だけである。美だけが真実を映し出す。そして、学問も芸術も、ここで言われている「行き倒れになつている主人のまわりに人を呼び寄せるべく吠える犬」の役割にまで透徹されねばならないであろう。人々の心を覚醒させ、一八〇度転回させる力をもたねばならないであろう。というのも、ヴェイユが述べるように、「知性はおそらく、わたしたちの能力のうちにあつて、欲びが欠かせないただひとつの能力であろう。欲びがなければ、知性は窒息してしまふ」<sup>(16)</sup>からである。

### 結びにかえて

サミュエル・ベケット (Samuel Beckett) 一九〇六—八九年) が『ゴドーを待ちながら (En attendant Godot)』(一九五二年)をあらわすおよそ一〇年前、同世代のシモーヌ・ヴェイユは、のちに『神を待ちのぞむ (Attente de Dieu)』(一九五〇年)に所収される草稿をあらわしていた。不在の他者ないし神を「待つこと」、そのイメージのうち

に他者と神は生きられている——そのことを両者は暗い時代の直中で、表現しようとしていた。しかしながらヴェイユの言葉には、ベケットのような文学的な高さはない。それにもかかわらず、『神を待ちのぞむ』には『ゴドーを待ちながら』に匹敵する、わたしたちの心を震撼させ、覚醒させる力がある。その美のありようは、文学性とは別の、いわば実在の眼差しによる、「哲学という芸術の私たち」がわたしたちの内側から喚起するものである。

ところで、わたしの研究がたえず多岐に分化してゆくのは、ある意味では、いつでも目指したその先が「ずれていく」からである。その無限の「ずれ」の運動のなかにわたしの思考がある。この無限の「ずれ」の運動のうちに、うつすら、かすかに「認識」が垣間見える。

もとより、わたしたちの誰ひとりとしてその研究対象の哲学者ではない。対象の哲学者の言葉と思想にそれらが自らの血肉となるまで沈潜する。そこから対象からあらんかぎり遠くに離れ、いったんすべてを捨象し尽したときに、自らの言葉と思想が紡ぎ出されるのである。この運動の過程においてのみ、ある思想を真に受け取り直したと言えるのではなからうか。

哲学には、たった一粒の種がやがて大樹となり森となるような、妙味がある。本を閉じ、立ち上がり、ある方向に

向かつて走り出したくなるような心の震えを感じたならば、それを自らのうちで育て、他者をも触発するまでの言葉を陶冶する義務がわたしたちひとりひとりにある。

### 注

(1) 今村純子「闇夜と光彩のあいだに」『ジャンニ・ヴァッティモ／ビエル・アルド・ロヴァッティ編、上村忠男／山田忠彰／金山華／土肥秀行訳「弱い思考」法政大学出版局「叢書・ウニベルシタス」(二〇〇二年)』書評、図書新聞 二〇一三年二月二十三日号「三〇九九号」、二〇一三年、三面。

(2) Simone Weil, 'Lettres à ses parents', *Œuvres de Londres et dernières lettres*, Paris, Gallimard, 1957, p.250. シモーヌ・ヴェイユ、田辺保／杉山毅訳「父母への手紙」『ロンドン論集とそれらの手紙』勁草書房、一九六九年、三三四頁。

(3) 愛は硬いものの上を歩まず、柔らかいものの上を歩まず……というのも、愛がその居を構えるのは、神々や人間の心と魂の内部にかざられ、すべてのものの魂の内部ではないからです。性格が硬い魂に出会うと、愛は立ち去ってしまいます。しかし性格が柔らかい魂に出会うと、愛はそこに居を構えます。……したがって愛は、とても若く、とても繊細で、さらに、その実体が流体のようなものです。『プラトン』『饗宴』195c-196b. シモーヌ・ヴェイユ、今村純子訳「前キリスト教的直観」法政大学出版局、二〇一一年、五六―五七頁。

(4) Simone Weil, *Œuvres complètes de Simone Weil VI Cahiers 4 (février 1942-juin 1942)*, Paris, Gallimard, 2002, p.362. シモーヌ・ヴェイユ、田辺保訳「超自然的認識」勁草書房、一九七六年、三六〇頁。

(5) 「何ひとつ不正義を冒していないのに、不正義であるという最大の悪評を受けさせるのです。というのも、そうすることがその

人の正義の試金石となるからです。悪評とそれがもたらす数々の結果は、はたしてその人を萎えさせることがないかどうか。反対に、正義であるにもかかわらず生涯にわたって不正義だと認められながら、泰然自若としていられるかどうか。こうして正義の人が正義の極に、不正義の人が不正義の極に至るならば、両者のいずれがよりいっそう幸福であるかをはっきりとわかつていましょう。……このような魂の状態にあって、正義の人は鞭打たれ、拷問され、縛られ、目を焼かれ、ついには、ありとあらゆる辛酸をなめた末に磔にされるでしょう。そうして、正義であることではなく、正義と認められることを望むべきだと思いが知らされるでしょう。』(プラトン『国家』360e-361b, 362a, 367b, 367c. 前掲、シモーヌ・ヴェイユ『前キリスト教的直観』、九〇―九二頁)

(6) Simone Weil, 'L'Amourde Dieu et Le Malheur', *Œuvres complètes de Simone Weil IV Écrits de Marseille vol.1 (1940-1942)*, p.352. シモーヌ・ヴェイユ、渡辺義愛訳「神への愛と不幸」「神への愛についての雑感」現代キリスト教思想叢書 6「白水社、一九七三年、八五頁。

(7) *ibid.* Simone Weil, 'La Personne et le sacré', *Œuvres de Londres et dernières lettres*, p.20. 前掲、シモーヌ・ヴェイユ「人格と聖なるもの」『ロンドン論集とそれらの手紙』一五頁。

(8) *ibid.* Simone Weil, 'Fragments et Notes', *Œuvres de Londres et dernières lettres*, pp.180-181. 前掲、シモーヌ・ヴェイユ「断章と覚え書き」『ロンドン論集とそれらの手紙』二二六頁。

(9) 「プラトンは、その神話だけをしつこく語ってはごまかさない。だから、神話を敷衍することは恣意的な解釈をする(こと)ではない。むしろ、敷衍しないほうが恣意的な解釈をすることになる。』(前掲、シモーヌ・ヴェイユ『前キリスト教的直観』五四頁)

(10) 「彼女の著作が未完結で問題を孕んでいる」と、また、彼女

の著作には逆説、欠落、矛盾が氾濫していることは、紛れもない事実である。もっと長く生きたなら、彼女は間違いなく自身の思想を体系化し、一貫性をものにしたであろう、と好んで言われる。……だが、シモーヌ・ヴェイユの思想は、偶然ではなく、その成立からして未完結であり、逆説を孕むものであることを、われわれは確信している。そして、おそらくこのことである。……シモーヌ・ヴェイユという「現象」は唯一で、模倣しえないものである。実存主義、弁証法神学、聖神学の復興の時代にあつて、彼女の思弁的神秘主義は、キリスト教的プラトニズムの偉大さと、それが現代において欠如していることをただひとり孤高に証言しているのである。』(ミクロス・ヴェイト、今村純子訳「シモーヌ・ヴェイユの哲学」慶應義塾大学出版会 二〇〇六年、三四―三四二頁)

(11) Simone Weil, *L'Enrichissement*, Paris, Gallimard, folio, 1990, p.124. シモーヌ・ヴェイユ、山崎庸一郎訳「根をもつこと」春秋社、一九六七年、一一三頁。

(12) Simone Weil, *La Condition ouvrière*, Paris, Gallimard, folio, 2002, p.69. シモーヌ・ヴェイユ、黒木義典／田辺保訳「ある女生徒に宛てた手紙」『労働と人生についての省察』勁草書房、一九六七年、二三三頁。

(13) たぐえは、今村純子「アニーモシンの詩学——映画『千と千尋の神隠し』をめぐる』、『シモーヌ・ヴェイユの詩学』慶應義塾大学出版会、二〇一〇年、七―一八頁。

(14) Simone Weil, *Œuvres complètes de Simone Weil VI Cahiers 1 (1933-septembre 1941)*, Paris, Gallimard, 1994, p.298. シモーヌ・ヴェイユ、山崎庸一郎／原田佳彦訳「カイエ」みすず書房、一九九八年、二〇五頁。

(15) *ibid.* Simone Weil, 'La Personne et le sacré', *Œuvres de Londres et*

demieres lettres, p.38. 前掲「人格と聖なるもの」、ロンドン論集  
とや(1)の手紙」三八頁。

(16) 前掲、シモース・ヴェイユ『前キリスト教的直観』七〇頁。

◆ 本稿は、日本哲学会第七二回大会、男女共同参画・若手研究者  
支援ワーキング・グループ主催ワークショップ「哲学とミソジ  
ニー」(二〇一三年五月二日 於お茶の水女子大学、提題者・  
和泉ちえ／小島優子／今村純子)での提題「哲学という芸術の  
かたち」および、日本大学人文科学研究所哲学ワークショップ  
第四回「哲学とミソジニー、ふたたび」(二〇一三年六月二三日  
講演者・小島優子／今村純子／野尻英一)での講演「美によ  
る抵抗のかたち」と、両日のフロアーからの質問を受けての討  
論を土台に起草したものである。

(いまむら・じゅんこ 早稲田大学)

特集\*男女共同参画

## 月経について語ることの困難

——身体についての通念が女性の社会参画にもたらす問題点——

宮原 優

はじめに…排除される身体

先日、画像投稿サイトの「インスタグラム」において、「不適切である」ことを理由に、ある一枚の写真が削除された。削除されたのは、ベッドに横たわる一人の女性の写真である。女性の服装はごく一般的なスウェットとシャツで、決して露出度が高いわけではない。またベッドもごく一般的な、清潔感のあるベッドであり、全体的に何ら過激な印象を与えるものではない。この写真の何が問題視されたのだろうか。問題となったのは、シートとスウェットパ  
ンツにほんのぼつちりとついている、経血の染みである。それは私をふくめ、多くの女性にとって、非常に一般的で日常的なものに感じられる光景だ。これが「不適切なもの」とみなされて、この写真が削除されたのである。月経

## 理想社 躍動する古代ローマ世界

支配と解放運動をめぐる

倉橋良伸・栗田伸子・田村孝・米山宏史 編

ISBN4-650-90216-9 本体価格4500円 A 5版410頁

イタリア半島から地中海世界、ヨーロッパ、さらに中東へと拡大していったローマ世界を、それに対抗する勢力とともに見てゆく。

## 歴史とは何か

——歴史の意味——

レオンハルト・ライニッシュ 編 田中元 訳

ISBN4-650-10429-7 本体価格1456円 B 6版190頁

グロー・マン、レヴィット、ブルトマン、リット、トインビー、ポパー、バルタザールによる、歴史の意味をめぐる論集。

〒270-2231 千葉県松戸市稔台2-58-2 TEL 047-366-8003 FAX 047-360-7301

は社会において「不適切なもの」とみなされ、そして社会生活やコミュニケーションから排除されている。

アメリカの哲学者アイリス・マリオン・ヤングは、次のように語っている(1)。通常、出産可能な年齢の女性は毎月月経の不快や痛みを経験する。そして通常、女性は月経を徹底して他者から隠蔽しなくてはならない、と。公共の場で月経について語ることは、あるいは社会生活において月経が露わになってしまうことは「不適切である」とみなされる。したがって多くの女性は、社会活動の場、他者との交流において、月経でないふり、痛みがなく、不快がないふりを強いられている。そしてそれが「エチケット」なのである。

ヤングはまた、月経そのものよりも、月経を隠蔽すること、月経でないふりをするこのほうが、女性に大きな負